りびんぐらいぶず　令和4（2022）年2月第1号

御門徒さんのお家の遷仏法要記念誌

◆ご讃題

◆本願の名号は正定の業なり。至心信楽の願（第十八願）を因とす。

（Ref『行文類二』「正信偈」註釈版聖典 P203）

◆「本願名号正定業」といふは、選択本願の行といふなり。「至心信楽願為因」といふは、弥陀如来回向の真実信心なり、この信心を阿耨菩提の因とすべしとなり。

（Ref『尊号真像銘文』「正信偈」註釈版聖典 P671）

◆「即是其行」といふは、すなはち選択本願これなり。（中略）

『経』（大経･下）には「即得」といへり、釈（易行品十五）には「必定」といへり。「即」の言は願力を聞くによりて報土の真因決定する時剋の極促を光闡するなり。

（Ref『行巻』「六字釈」註釈版聖典 P170）

◆はじめに

浄土真宗のご法義をお伝えする上での課題は教化（きょうけ）上最も大切な**「本願、他力」**という言葉の認知度が低いことでした。

「他力」とは、如来様の本願力であり、願力とは聞く対象であることが六字釈から明らかですので、名号そのものであると知られます。如来様のご本願が名号となって成就し衆生救済の働きとなって居て下さるお姿であります。

そのことを押さえたとしても「言葉が生きている」と云える為には衆生の身の上に係る本質論「仏願の生起本末（しょうきほんまつ）」が実感として受けとめられて居なくてはなりません。

ところが、最も御門徒さんが親しんでいらっしゃる筈のお正信偈の御文は「本願の名号は正定の業なり」という簡単極まりない御文であり、衆生がお救いに与る道行きが明解ではありません。あまつさえ、覚如上人によって西山派から導入された「名号大行論」がこれに拍車を掛けます。「本願の名号は正定業なり」をそのまま読めば、寧ろお名号の一人働きとしての名号大行論の根拠であるかの誤解を残すからです。

至心信楽の願を因とすというのでは、第十八願を因とすということであり、その構造はあまりにも不明確です。

◆偈前（げぜん）の文にお訪ねする

親鸞聖人直々のお正信偈の御註釈である尊号真像銘文の御文には、**「本願名号正定業」といふは、選択本願の行といふなり。」**とありますから、これは「乃至十念」の第十八願の御文であると受けとめられます。

但し、「本願の名号」自体は、正依の大経第十八願文に直接現れている訳ではありません。そこでその構造の大筋は**「偈前の文」**にお訪ねしておかねばなりません。

それには次の様にお説き下さっています。

「おほよそ誓願について眞実の行信あり、その眞実の行の願は、諸仏称名の願（第十七願）なり。その眞実の信の願は、至心信楽の願（第十八願）なり。これすなはち選択本願の行信なり。」

はじめに「眞実の行の願」は、第十七願となっているのは何故かという点を明らかにしておかねばなりません。

この願は、第十八願が成就されても、お救いのエンジンたるお名号の功徳は衆生には明らかではありませんので、まず十方世界の無量の諸仏方（人間世界ではお釈迦如来様）が名号の功徳を讃嘆して下さるのです。

大経の謂われを縷々説き明かした上で諸仏如来が実践されたのは南無阿弥陀佛とお称えなさる讃嘆行だったのです。この讃嘆行によって、十方世界の衆生は初めてお名号の功徳と声になって現れ給う阿弥陀如来のお喚び声（本願招喚の勅命）に目覚めることになるのです。

その讃嘆行を眞実の行と親鸞聖人は仰せ下さったのです。

諸仏讃嘆の行に接した衆生は、自らも又これに習って「乃至十念」のお念仏を称えます（第十八願）。このお念仏は、如来様がお手許で仕上げられた如来様の行ですからこれを「大行」と称します。如来様はこれを衆生に回向していて下さっていたのです。

如来様から本願力回向された「大行」ですから衆生が「南無阿弥陀佛」と称えれば、衆生の上に直ちに如来様の行（「大行」）が働き出して下さる。それが証拠に「南無阿弥陀佛」と称えれば、直ちに「南無阿弥陀佛」と聞こえて下さるのでした。聞こえて下さった南無阿弥陀佛こそは、如来様直々のお喚び声だったのです。

如来様は、衆生が称えればその都度お喚び声となって喚び続けて居て下さる。

ですので衆生は煩悩の身のままで娑婆世界にありながら、お喚び声となって届いて下さる如来様にお遇いすることになるのでした。これを**聞遇（もんぐう）**と申します。

こうして如来様から本願力回向された如来様の行を行ずる度毎に聞こえて下さる如来様のお喚び声に衆生はいつのまにやらうなづき喚び覚まされるのでした。

喚び覚まされるその瞬間、「ああこれが如来様のお喚び声でございましたか」と頭（こうべ）を垂れるその瞬間、衆生は如来様のお救いに与っているのでした。これが信心獲得の「とき」を顕す「時剋釈（じこくしゃく）」です。

◆お念仏の道の構造

第十八願成就文の「聞其名号」の「聞」について親鸞聖人は、**「聞といふは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし。これを聞といふなり**（信文類末、註釈版聖典 p251）」と仰せ下さいました。

この御文には、「仏願の生起本末を繰り返し聞いている」段階があり、その上で、ついに「疑心あることなし」という事態に恵まれるのだとご案内しました。

そのことを表していらっしゃる御文として、浄土和讃大経讃第六十六番（註釈版聖典 p568）

定散自力の称名は
果遂（かすい）のちかひに帰してこそ
をしへざれども自然に
真如の門に転入する（「大経讃」第六十六番）

を引かせて戴きました。

是は、今日的表現で捉えれば、お念仏のプロセス上に終に真如の門(第十八願の他力念仏、註釈版脚注 p569))という究竟位に転入する段階があるのだとご紹介したのでした。

このことは、寧ろ、自然科学的表現に慣れ親しんだ戦後の日本人には分かり易くご案内できます。水を熱して参りますと一気圧では百度に達すると沸騰します。相転換です。
精神集中してお念仏し或いは散り乱れた心のままでもお念仏を称えることができます。
初めは私が称えていると衆生は理解します。

けれどもお取次に遇い、このお念仏は如来様から本願力回向されたお念仏であるから、称えれば直ちに如来様のお喚び声が聞こえて下さるのだとお育てに与っている間に、とうとう、「ああこれが如来様のお喚び声でございましたか」と頭が垂れる瞬間がやって参ります。信心獲得のその「とき」です。
本願力回向のお念仏の働きを通して、信心の働きに遇わせて戴いた瞬間です。
自らの行だとのこだわりの少ない人ほど、自力我慢の気圧が低く速く沸騰し、一向に自らのこだわりに住する人は百度を超えてもなかなか沸騰しないことでしょう。沸騰は水が水蒸気に相転換する姿でありました。
眞実信心の獲得も大行を賜って行ずるお念仏の道の上に「さようか」と恵まれた相転換の姿であると頂戴できることかと窺わせて戴くことであります。合掌。

◆仏教婦人会例会二月十六日(水)十九時半
お聴聞は、寺院活動の中核ですので、仏婦例会は、原則実施する方向でご了解下さい。
◆（お断わり）
1. 当初、1/30(日)予定の初講は、新型コロナ第六波蔓延の折から、2/20(日)に一旦延期しましたが、ピークアウトが予想以上に遅れておりますので、大勢での会合は差し控えることにし、役員会で打合せた資料配付に替えることになりました。どうぞご容赦下さい。
2. 仏壮お聴聞の会は、本来 2/6(日)の予定でしたが、初講準備の総代会の打合せの予定となり、その後打合せは 2/5(土)に移して中止した経緯で中止してしまいました。ご容赦下さい。

著作編集兼発行元（本願寺派 正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職堅田 玄宥